

アンコール・ワットに墨書を残した
森本右近太夫一房の父、森本儀太夫の墓をめぐって(3)

中 尾 芳 治

2021 8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

アンコール・ワットに墨書を残した 森本右近太夫一房の父、森本儀太夫の墓をめぐる(3)

中尾 芳 治

1. はじめに

私はこれまでに「アンコール・ワットに墨書を残した森本右近太夫一房の父・森本儀太夫の墓をめぐる(1)・(2)」と題する小稿を『京都府埋蔵文化財論集』第6・7集(2010・2016年)に発表し、加藤清正の武将として有名な森本儀太夫一久一族の系譜関係を追ってきた。多くの未解決の問題があって探索を続けてきたが、現在熊本大学附属図書館に収蔵されている『森本系譜』という史料の存在を知り、その調査を通じてこれまでの研究課題に一定の前進が見られたので報告するものである。

2019年3月7・8日、「大規模遺跡OB会」が高島忠平・折尾学両氏の担当で「地震災害と歴史遺産」をテーマに熊本県で開催され、熊本城修復現場や阿蘇神社・阿蘇国造神社などの罹災状況や修復状況を見学した。その時、熊本城調査研究センターの鶴嶋俊彦氏や杉村章一・島津義昭両氏に大変お世話になった。杉村・島津両氏には加藤清正の武将森本儀太夫一族について調査していることを話し、「アンコール・ワットに墨書を残した森本右近太夫一房の父・森本儀太夫の墓をめぐる(1・2)」の抜刷をお送りしてご教示を乞うたことがあった。

2020年6月、中尾芳治編『難波宮と古代都城』(同成社)が刊行された際、寄稿者や予約購入者のみなさんに『難波宮からアンコール・ワットへ—中尾芳治著作目録—』をお送りしたことがある。予約購入者であった島津義昭氏にもお送りしたところ、お便りと共に1999(平成11)年10月に「熊本県玉名市立歴史博物館ころもピア」で開催された企画展『朱印船貿易と肥後』の図録をお送りくださり、アンコール・ワットに墨書を残した森本右近太夫一房関連史料として『森本系譜』が展示されていたことをご教示いただいた。図録に次頁のような『森本系譜』表紙写真、解説、森本家系図が掲載されており、私がこれ迄追跡してきた森本右近太夫一房とその父森本儀太夫一久ら森本一族の系譜を復元する上で重要な史料であることが分かった。

私は島津氏にお願いして、かつてこの企画展と図録の編集を担当された当時「玉名市立歴史博物館ころもピア」学芸員の村上晶子氏を紹介していただき、『森本系譜』の内容や釈文などについて村上晶子氏からいろいろご教示を頂いた。

2. 『森本系譜』の使用について

『森本系譜』は1999年(平成11)10月の『朱印船貿易と肥後』展開催当時は熊本大学付属図書館寄託資料であったが、現在では熊本大学付属図書館所蔵となっている。そこで2020年9月12日、同館に『森本系譜』の閲覧と写真撮影について問い合わせたところ、「現在、熊本大学付属図書館では熊本大学の新型コロナウイルス感染症に対する教育活動の実施方針に基づき学外者の入館を制限しております。入館制限の解除後であれば、貴重資料の閲覧および写真撮影が可能となります」と

のことで、2021年1月9日現在『森本系譜』を実見すること

が出来ていない。村上晶子氏が熊本大学付属図書館に問い合わせくださり、『朱印船貿易と肥後』図録掲載の『森本系譜』表紙写真の転載、本文については史料を閲覧したことのある村上晶子氏の責任で掲載することについて了解を得ることが出来た。

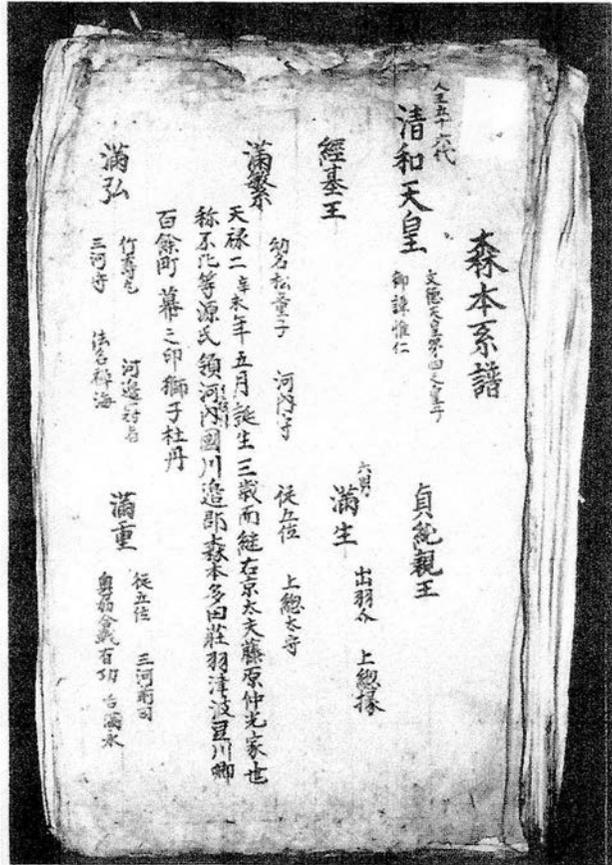
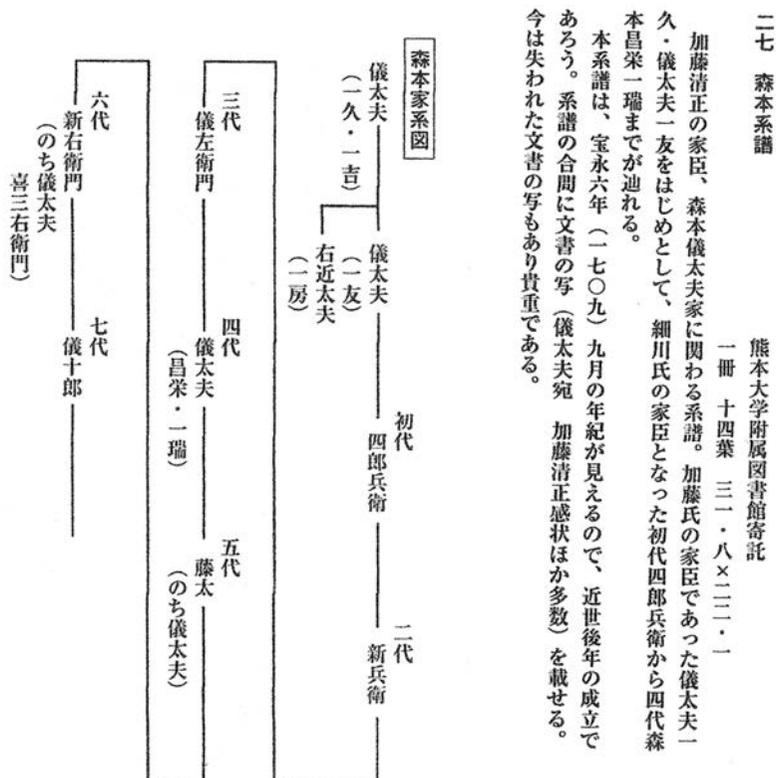


写真 『森本系譜』表紙(『朱印船貿易と肥後』図録所載)

3 村上晶子氏による『森本系譜』の解説と一部釈文

解説 『森本系譜』 熊本大学付属図書館所蔵、1冊 14葉 31.8×22.1

加藤清正の家臣、森本儀太夫一久にかかわる系譜。森本儀太夫(一久)は、山城国山崎在。加藤清正の家臣となり、天正16(1588)年肥後国に下向した。飯田覚兵衛・庄林隼人とともに加藤清正の三傑といわれる。武者奉行や津奈木城代などを勤める。朝鮮出兵では亀甲車による(晋周城)一番乗りの功により、豊臣秀吉より「儀」の字を賜った。禄高は5200石余。



第1図 『森本系譜』解説及び森本家系図(『朱印船貿易と肥後』図録所載)

系譜は、森本家の始まりから、儀太夫一久、その子儀太夫一友、細川家の家臣となった初代四郎兵衛から四代森本昌栄一瑞までが辿れる。一久が津奈木城で慶長17(1612)年病没すると、その子一友が後嗣忠広に入れられず、寛永8(1631)年国を離れ、京都に登りその地で没したことなど記している。

本系譜は、系譜末尾に宝永6(1709)年9月の年紀が見えるので、近世後期の成立と考えられる。系譜中には、文書の写し(儀太夫一久宛 加藤清正感状ほか)17通を載せる。失われた文書の写しもあり貴重である。

なお、アンコール・ワットを訪れ落書き(墨書)を残した儀太夫一久の子一房は、系譜中には見えない。(村上晶子、2020年10月執筆)

『森本系譜』（釈文抄）

六郎 外記 民部太輔

— 輝 —

管領細川政元公に属し、禄二千貫。明応二年四月、畠山の為に討死。

掃部 右京亮 民部太輔

— 明 —

菅領細川高国公に属し、大永七年五月、桂川に於いて戦死。

松千代 千太郎

— 親 —

享禄四年六月二四日、高国公尼ヶ崎に於いて有事の日殉死、十五歳。

梅千代 右京亮

— 慶 —

父兄没後孤となり、浪々して山城国山崎に住し、天正十六年、肥後国に下向。同十七年二月、津奈木に於いて病死。

力士 儀太夫 義太夫

— 久 —

天正十一年五月始め、加藤清正朝臣に仕える。同十五年豊州岩館城を攻め、功有り。同十六年閏五月禄二千石を賜り、武者奉行と為り、同六月肥後国に下向し、芦北郡津奈木城代と為る。同十七年十一月五日天草に戦い、翌六日清正朝臣と木山弾正接戦、傍らを離れず相働き、狙撃鎗下首級二つを得たり。弾正討たれ残党崩るるを追撃して首級三つ得たり。同二十日本渡城天草伊豆守を攻め、同二十五日一久先登感書有り。

(文書)

天正二十年朝鮮国攻撃の節、正月二十六日於□□勢大坂に至り、同二月二十一日大坂の発船しある泊りにて、一久一手を以て賊船を撃し、与力萩又兵衛、加々山弥蔵、杉忠左衛門、大窪平三郎、柏原長兵衛、寺尾甚之允、岡村助左衛門、嘉悦七助、三輪次郎右衛門ら各功あり。同三月四日、

朝鮮国に渡海し、釜山浦に着く。東萊海道を押し王城に攻め入り、五月十六日王城を立ち、六月朔日永興縣に着き、七月二十三日ホイレクに着陣。翌二十四日清正公に従い、城内に入り、臨海順和君を始め官人ら擒ひられ、一久は南兵使を預かりて、城を出る。同二十六日ヲランカ井延胆の城を責め、先登して城を陥す。その夜柳崇に宿陣す。兀良哈人夜半に働き来る。一久奮撃して功有り。翌二十七日兀良哈の都に到り、一久先登狙撃して城に火をかけ、都城を焼く。即晩又兀良哈人大軍を以て責め来る。一久先登血戦す。雨降りて戦い難く繰引きにして朝鮮国に帰りキセクに陣す。閏八月七日青洲浦に到り、セルトウス將軍を攻む。清正公の命によって一久与力の士卒を師いて忽ちに城壘を攻め破り敵將を擒にす。清正公感状を賜う。

(略)

同九月大明カゲアミノ軍勢復び蔚山の城を責む。同十六日の夜に入り風雨激しきに乗じて、清正公人数を出して、夜軍せしむ。一久一番に鎗を入れて功あり。同十月帰明。慶長四年大坂にあり、加賀国主前田利家卿誘い奉り、黄門公北国に赴かるるの日、清正公一久を以て黄門公の旅程を守護す。是に於いて途中より黄門公を還し奉らる。慶長五年九月大友義統の一揆豊州木付城を攻む。松井佐渡守、有吉四郎右衛門を援ん為に九月十五日清正公に従軍し、隈本を出陣し、翌十六日小国に到り、十七日未の刻に豊州珍珠郡ヒキチ村に着、松井有吉の扱書を閲して軍を帰し、直ちに当國宇土城を攻む。八代薩摩の援兵を押へとして、一久父子相田奥村押向い、薩州の援兵を小川吉本にて防ぎ、三十余人を討ち取る。同六年二月領知証書を賜る。一久賜る禄五千二百五十石、外に四千石は軍役米并に与力知行の高也。同年八月七日熊本茶臼山城楯初め三の丸乾の方隅石垣三階の櫓、一久一手にてこれを築く。即ち賜いて屋敷として之に居れり。同十六年六月清正公薨逝、曾て遺言して一久を以て令嗣忠広公の扶翼となす。同十七年六月一久五十三歳津奈木城に病死。

新蔵 儀太夫

友

父一久に従い所々に於いて戦功あり。慶長十七年亡父の遺領を賜り、武者奉行と為る。江府御城外弁慶堀再営の日、これを奉行し、鞍置馬賜る。

寛永七年忠広公の不是を憂い、一命を委ね屢々諫めれども容れられず。同八年二月去って京都に登り、柳馬場に住し、正保四年正月七日卒。法号浄證院殿道仙大居士。

勝九郎

純

外記 藤太 四郎兵衛 (細川森本家初代)

昌 定

始一□

父一友に従い京都に在り。一友或時昌定に、天草合戦の日秀吉公より拝領の鎗并に朝鮮陣中に着せし鎧を譲り与へ、儀太夫か嫡子なることを名乗るべからず、古君に対して不忠なりと庭訓す。寛永十三年十二月肥後国に下向し、肥前有馬の役細川の手に属し、證拠状二封を得たり。その文に曰く有馬凱陣の後、細川羽林忠利君、同拾覚光利君、同羽林綱利君に仕え奉り、米知百五十石肥州山鹿郡名塚村玉名郡岩原村兩所を賜い、行状先祖付を出す。延宝四年八月二十五日病卒。本府に於いて、行年六十四歳、山蓮政寺堂後に葬る。謚得法院宗受日持居士。

細川宮内

廣 通

父一友京都に在り、諸侯に招るれとも敢えて二君に仕んことを欲せず。嫡子外記をも招きに応せず、毛利甲斐守頼りに所望たるによって、旧君の由緒旁以て辞するに所なく二男廣道を仕えしむ。□□古君に対して名家を免さず、毛利候細川の氏を授けて家臣とし、長州の建令とし禄三千石を賜う。宝永六年十月病死家に於て、七十三歳。

十之允 母土肥源左衛門正平女

昌 真

奉仕 羽林綱利君賜月俸許多先父卒葬智雄院堂東

虎之助 新兵衛 母昌真に同、延宝 年 月二十九日卒
当證院妙元

昌 時

遺跡を継ぎ、元禄 年十一月十五日病死、四十四歳。蓮政寺堂後葬る。
諡□□院宗悦日相居士 一生の官務先祖付けに出す。

駒之介 儀左衛門 四郎兵衛

昌 師

遺跡を継ぎ延享元甲子年五月三日家に病卒、六十七歳、八代本成寺の堂後に葬る。

金吾 弥藤太 儀太夫

瑞

家督を継ぎ、行事先祖付けに出す、法号陵雲院友仙日桃

4. 『森本系譜』による新知見と考察

『森本系譜』による新知見

『森本系譜』の記述に従って森本氏の系図を森本儀太夫一久を中心に復元すると次頁のようになる。

『森本系譜』の存在を知って得た大きな成果は、森本儀太夫一久とその子儀太夫一友の継承(相続)関係やその事績が明らかになったことにより、京都乗願寺の「素正肥後国 森本儀太夫」墓の被葬者がこれまで考えてきた「森本儀太夫一久」ではなく、その子「森本儀太夫一友」の墓である可能性が出てきたことである。一方、森本儀太夫一久の子で一友の弟にあたると考えられ、アンコール・ワットに墨書を残した森本右近太夫一房の存在は明確にできなかった。以下具体的に述べる。

『森本系譜』の注記によれば森本儀太夫一久は、加藤清正死去の翌年の慶長17(1612)年6月に53歳で津奈木城で病死している。そして同年その遺領は長男の儀太夫一友に譲られ家督が継承されたことが分かる。儀太夫一友は武者奉行を勤め、江戸城外弁慶堀の修復に功有って鞍置馬を賜っている。寛永7(1630)年、加藤清正の跡を継いだ忠広の「不是を憂い諫言すれど容れられず」、寛永8(1631)年2月、加藤家を辞して京都に登り、柳馬場に住して正保4(1647)年正月7日に死去している。『森本系譜』によって森本儀太夫一久の没年やその子一友の存在が明らかになったのは大きな成果である。

論考(1)(2)では京都市乗願寺に所在する「素性肥後国 森本儀太夫」銘の墓を一久の墓と考え、一久の没年を慶安4(1651)年6月11日と考えてきた。ところが『森本系譜』によれば、一久は慶長17(1612)年6月に熊本津奈木城で病死しており、その家督を継いだ一友が寛永8(1631)年、加藤家を浪人して京都柳馬場に移住し、正保4(1647)年正月七日に死去していることを考えると、乗願寺所在の墓は儀太夫一久の墓ではなくその子儀太夫一友のものである可能性がある。ただその没年や院号(法号)が一致しないことが問題である。

細川森本家の系譜については論考(2)で紹介した『続肥後先哲偉蹟』巻4の「森本一瑞」項に記載されている細川森本家系譜では、「先祖森本儀太夫、一久 加藤清正以来、蘆北郡津奈木城代にて、武者奉行兼勤、加藤家御改易以前、様子有之浪人仕、京都に罷越、正保四年病死、其子四郎兵衛、島原一揆の節、御人数に加里相働、寛永十八年二月、歩御使番、寛文十一年十二月、島原にて働第一に思召し、百五十石拝領、大組附」とある。

同じく論考(2)で紹介した細川森本家の『先祖附 南東二四』では「一 先祖森本儀太夫儀、加藤主計頭殿江相勤居申候、(曾祖父)^(註2)森本四郎兵衛儀、右儀太夫孫ニ而御座候、若年ニ付、儀太夫育ニ而罷在、加藤肥後守殿御改易之節京都江罷下居候処、寛永十三年妙解院様御代、御家を奉願、御国江罷下居候処」とあって、細川森本家初代の森本四郎兵衛は前者では「先祖森本儀太夫一久の子」、後者では「先祖森本儀太夫の孫」となっていて矛盾するが、『森本系譜』にあるように森本儀太夫一久の子儀太夫一友を介在させて考えれば、四郎兵衛は先祖森本儀太夫一久の「孫」であり、一久の子儀太夫一友の「子」であって矛盾は解消する。

即ち『続肥後先哲偉蹟』の記述は「先祖森本儀太夫一久、加藤清正以来蘆北郡津奈木城にて武者奉行兼勤。(其子一友)加藤家御改易以前、様子有之浪人仕、京都に罷越、正保四年病死」と解し、『先祖付 南東二四』では「四代一瑞の曾祖父に当たる森本四郎兵衛は、先祖森本儀太夫(一久)の孫である。四郎兵衛



第2図 『森本系譜』による家系図

幼少時、父儀太夫一友(儀太夫一久の子)が養育したが、一友は加藤肥後守(忠広)改易前に浪人して京都へ移住し、正保四年に病死」と解するのである。

儀太夫一久(一吉)の子で寛永9(1632)年正月、亡父母のためにアンコール・ワットに4体の仏像を奉納した旨の墨書を残した森本右近太夫一房の名が『森本系譜』には記録されていない。『森本系譜』には儀太夫一友の弟として「一純」の名があるが一房との関係は不明である。徳川幕府の鎖国政策の下で海外渡航歴のある一房の名が秘されたことが考えられるかもしれない。^(註3)

儀太夫一久の生没年

『森本系譜』によれば森本儀太夫一久は慶長17(1612)年6月に53歳で津奈木城で病死している。京都市乗願寺所在の墓に記す「素生肥後国 森本儀太夫」[月窓院殿光誉道悦居士]は「慶安4(1651)年卯6月11日」となっていて没年が合わない。一方、『森本系譜』によれば一久の子一友は寛永8(1631)年2月、加藤家を去って京都に移住し、正保4(1647)年正月7日に卒し、「法号浄證院殿道仙大居士」となっていて、没年・法号が一致しない。また、『森本系譜』には乗願寺に残る位牌に記される「森本左太夫、延宝2年3月28日没」、「肥後森本左近、寛永2年没」、「森本玄徳子、天和2年正月21日没」に該当する人物は見当たらない。

矢野四年生『伝記加藤清正』は森本儀太夫一久は「慶長17(1612)年津奈木城で病没」とし、蒲生真紗雄「加藤清正家臣団事典」(安藤英男編『加藤清正のすべて』新人物往来社、1993)も「永禄3(1560)年生まれ、慶長17年6月、津奈木城で没」とする。『熊本県大百科事典』の森山恒雄執筆の「森本儀太夫」の項でも「永禄3(1560)年生まれ～慶長17(1612)年6月、津奈木城で病卒」とする。法号は蒲生真紗雄・森山恒雄ともに「森本斎一久大居士」としている。

いずれもその根拠は明らかではないが、「慶長17(1612)年6月、津奈木城で53歳で病没」とする点は『森本系譜』と一致する。以上から森本儀太夫一久の生・没年は永禄3年・慶長17年と考えてよいと思われる。

森本儀太夫一久の出自

私が森本右近太夫一房とその父森本儀太夫に関心を持ったのは1991年に「アンコール遺跡国際調査団」の一員として初めてアンコール・ワットを訪ねた折、十字回廊の石柱に残された一房の墨書を実見したことに始まる。それに加えてアンコール遺跡の調査中に面識を得たフランス極東学院のブルノ・ダジャンス教授の著書が団長の石澤良昭教授の監修のもとに中島節子訳『アンコール・ワット—密林に消えた文明を求めて—』(創元社「知の再発見」双書)として1994年に刊行され、石澤良昭 団長が「アンコール社会と日本人訪問

者」と題して墨書をめぐる諸問題を紹介される中で「右近太夫が父儀太夫とともに、父の生誕の地の京都山崎に移り住んでいた」と述べておられることであった。私自身が京都府乙訓郡大山崎町に居住していることもあって、森本儀太夫親子の山崎生誕・居住の痕跡を探ってみようと思いついたのが調査を始めた端緒である。

『森本系譜』の注記を見ると、森本儀太夫一久の曾祖父一輝は「管領細川政元公に属し、禄二千貫、明応2(1493)年四月、畠山の為に討死」、祖父一明は「管領細川高国公に属し、大永7(1527)年5月、桂川に於いて戦死」、父一慶はその兄一親が「亨禄4(1531)年6月24日、高国公尼ヶ崎に於て有事の日殉死、15歳」とあるように「父兄没後孤となり、浪々して山城国山崎に住し、天正16(1588)年下向肥後国、同17年2月津奈木において病死」している。これによって一慶の山崎居住とその子森本儀太夫一久が山崎で出生した可能性が生まれる。^(注4)

森本儀太夫一久の子一友の著作『加藤家傳』^(注5)には、加藤清正は永禄5(1562)年6月24日の生まれで「五歳ヨリ山州小崎^(山カ)ニ飄零ス。此日隣家ニ森本力士。飯田才八ト云者アリ。力士ハ祖父右京昌親。細川高国ニ従ヒ。桂川ニテ戦死シ。力士(后改主馬)山崎ニ長トナリ。其子力士。虎之助ト同年ノ生レ也。才八モ又同列タリ。其交兄弟ノ如ク。嬉戯スルニ竹馬竹刀ヲ事トス。虎之助八歳ノ時。力士才八ニ曰ク。今日ノ合戦雌雄ニ依テ。長ク君臣ノ約ヲ為ヘシトテ。又竹刀ヲ以テ戦フニ。虎之助。不勝ト云コトナシ。コレヨリ虎之助ヲ主ノ如ク重ンシ。兩人扈ニ従ヘリ」と森本力士・飯田才八が幼少時に清正に臣従したエピソードを伝える。

また、蒲生真紗雄「加藤清正家臣団事典」^(注6)では「飯田覚兵衛 生年不詳～寛永9(?～1632)年、才八、覚兵衛。諱は直景。山城山崎に生まれる。早くから清正に仕え」とある。これらから森本儀太夫(力士)・飯田覚兵衛(才八)は山崎で生まれた幼なじみで、幼少のころに清正と主従の約束をしたと読める。

安藤英男「加藤清正・その生涯と人物」^(注7)では、加藤清正は永禄5(1562)年6月、尾張中村で生まれ、3歳～13歳の間尾張津島で育ったとして「五歳ヨリ山州山崎ニ飄零」したことを否定しているが、同氏作成の「加藤清正文譜」では清正8歳のころ「竹馬の友・森本儀太夫、飯田覚兵衛と竹刀を以って雌雄を決し主従の約束をする」と幼年時代の主従関係を肯定している。

一方、森山恒雄「肥後加藤政権と重臣飯田角兵衛^(注8)(一)」の(二)飯田角兵衛家系と関係史料では「飯田系図 考證祖先之譜」(海妻甘蔵編)によって「飯田覚兵衛は永禄8(1565)年5月に生まれ、寛永9年9月18日に天草にて、68歳で死亡したことを伝えている。しかし

出生地と清正に仕えた時期は不明である。従来、飯田角兵衛の出生地については、『肥後古記集覧』が記す、加藤清正幼少時の住所の山城国山崎の隣家に森本力士と飯田才八が住んでいて、その時に君臣の約を為したという伝説をもとに語られていた。別本の『飯田系図』も住所を河内国とし、のち山城國小崎村に移るといって、『古記集覧』説に合わせているが、しかしどうも生年からすると、納得し難い点がある。生年が永禄8年だとすると、父親直澄はなお三好家に仕えていた時期であるので、前掲の2系図から考えると、角兵衛の生国は大和国とするのが妥当と思われる。とすると、エピソードが語るように、清正の幼少時よりの君臣の誓いを交わしたとする説は、訂正さるべきである」として、森本力士(儀太夫)・飯田才八(角兵衛)が幼少時山城国山崎に住んでいたとする説は伝説であるとして退けている。

森本儀太夫一久の出生(出身)地として山城国山崎を示唆するのは、今のところ『森本系譜』のその父一慶が「浪々して山城国山崎に住し」だけである。森本力士(儀太夫一久)・飯田才八(覚兵衛直景)が加藤清正に仕えた契機は天正11(1583)年4月の賤ヶ岳合戦時であったようで「清正この時森本力士、飯田才八を招き旧日の好みを以て始めて采邑70石宛を下向し、永く志を不忘、影と像の如く成へ師と制約す」(『加藤家傳清正公行状奇之巻』)とある。『森本系譜』中の森本(儀太夫)一久の注記にも「天正11年5月始め、加藤清正に仕える」とあって符合する。

森本右近太夫一房の墨書

論考(1)では京都市乗願寺に残る墓碑の「素生肥後国 森本儀太夫」、位牌に残る「月窓院殿光譽道悦居士 森本儀太夫」銘とその没年慶安4(1651)年6月11日を森本右近太夫一房の父森本儀太夫一吉(一久)のものと考え、右近太夫一房が墨書した寛永9(1632)年正月当時その父儀太夫一吉(一久)は存命していたとして「撰津池田の住人である父森本儀太夫一吉の現世利益と尾張名古屋出身の亡母明信大姉の後生の為に4体の仏像を奉納した」と解した。しかし一房の父儀太夫一吉(一久)はこれまで見てきたように慶長17(1612)年に没しているのだから、一房のアンコール・ワット参詣は亡父母の後生を願って4体の仏像を奉納するためであったと解するべきであろう。

論考(1)では寛永9年当時、父儀太夫一吉(一久)は存命で撰津池田に居住していたと考えたのであるが、すでに慶長17年に熊本津奈木城で死去しているのだから「撰州津国池田之住人」は出身地を指すものであろうか。儀太夫一吉(一久)は先述のように「山城国山崎」で生まれ育った可能性があるが、加藤清正の配下として仕えるようになったのは池田に居住していた時であったかもしれない。

戦国時代の森本氏

応仁・文明の乱以降足利將軍家や細川管領家の家督争いに伴いその被官である各地の在地領主層である国衆も対立抗争を繰り返した。^(註9)

細川政元は明応2(1493)年4月、「明応の政変」を起こして足利將軍を10代足利義材(義植)から11代足利義暉(義澄)に代え、以後將軍家は義植流と義澄流に二分され家督を争うことになる。これに反対して決起した畠山政長との騒乱は、明応2年閏4月25日、政長が自害し、義材が投降して終わる。

『森本系譜』に、森本一輝が「管領細川政元公に属し、禄2000貫。明応2年4月、畠山の為に討死」とあるのはこの時の政変を指すと思われる。

細川政元は修験道に凝り妻帯しなかったため実子がなく、後継の養子を三人(澄之、澄元、高国)も迎えたため政元の後継(細川京兆家の家督)をめぐる三者とその「内衆」が相争うことになる。

『森本系譜』の森本一族は細川高国に属して行動しており、森本一明は大永7(1527)年5月(2月?)の京都桂川の戦いで高国が敗れた時に戦死している。享禄4(1531)年6月、細川高国は世に「大物崩れ」と呼ばれた細川晴元(細川澄元の子)との摂津での戦いに敗れ、高国は身をもって尼崎に逃れたが、民家に潜伏しているところを捕らえられ、自刃させられた。森本一明の子一親は「高国公尼ヶ崎に於いて有事の日、15歳で殉死」しており、その弟一慶は「父兄没後孤となり、浪々して山城国山崎に住する」ことになるのである。

摂津の国衆たちは多くは管領細川家の被官となったが、その代表的なものは芥川(高槻市)の芥川氏・池田(池田市)の池田氏・伊丹(伊丹市)の伊丹氏の三家で、外にも吹田(吹田市)の吹田氏・瓦林(西宮市)の瓦林氏・伊丹の森本氏をはじめ各地には中小規模の国衆・地侍衆が存在した。

こうした摂津の国衆・地侍衆の中で注目されるのは伊丹氏の庶流の森本氏一族で、「明応9(1500)年9月、森本新左衛門尉が河内国誉田城で細川政元に属して畠山義英と合戦、政元没後の永正8(1511)年7月には森本新左衛門尉・新次郎・新五郎らが細川高国方として阿波から上陸した細川澄元の軍と和泉国家原に戦った。次いで、新五郎は永正17年、澄元が高国方の林正頼の拠る越水城を包囲した際には中村口でこれと対峙している。大永6年12月には森本新左衛門尉・源五郎・新五郎・吉祥寺ら森本一族は反高国方の細川晴元に呼応した国衆吹田氏と吹田で合戦したが、高国が將軍足利義晴を奉じて近江に逃亡したため、惣領伊丹氏ともども晴元方に帰順したらしい(北河原氏家蔵文書・北河原森本文書)。森本氏の居館は現在の伊丹市森本1～3丁目の称名寺付近にあったとされる(城郭体系12)。なお、杜本荘には伊丹氏流の森本氏のほかに多田院御家人となった森本氏がいた

ともいわれるが未詳(多田神社文書)^(注10)」である。

この伊丹森下氏と『森本系譜』の森本氏との関係は不明であるが、当初はともに細川政元・高国方として戦っているが、大永7年2月の「桂川の戦」で高国が細川晴元側に敗れ、將軍足利義晴と近江に逃亡すると伊丹森下氏は晴元側に帰順したらしいが、『森本系譜』に見える森本一民は「桂川の戦」では高国側に属して戦死しており、その子一親は享禄4年6月のいわゆる「大物崩れ」の戦いで高国が敗れ自刃すると、15歳で殉死するなど一貫して高国側で戦っているなど伊丹森本氏とは異なる対応を見せている。

こうした経緯を見ると『森本系譜』の森本氏は伊丹森本氏と関係の深い一族である可能性がある。森本右近太夫一房が寛永9(1632)年正月に残したアンコール・ワットの墨書にその父森本儀太夫一吉(一久)のことを「摂州津国池田之住人」と記しているのは、一吉(一久)がすでに慶長17(1612)年に死去していることを考えると論稿(1)で述べたような現住所では有り得ず、儀太夫一吉(一久)がかつて池田に住んでいたことがあり、その出自が摂津伊丹森本氏のような摂津の国衆の一人であったことを述べているのかもしれない。^(注11)今後の研究課題である。

この論考(3)を草するにあたっては村上晶子氏(元玉名市立歴史博物館こころピア学芸員)から『森本系譜』の積文や史料・文献の提供を含め様々なご教示を得た。厚くお礼を申し上げたい。ほかにも大阪城天守閣博物館の北川史館長や大山崎町歴史資料館の福島克彦館長からいろいろご教示を頂いた。

この論考に不備な点があるとすれば文献史料に暗い私の責任である。

(なかお・よしはる = 当調査研究センター理事・元帝塚山学院大学教授)

注1「大規模遺跡OB会」は1997年に平城宮・藤原宮跡、大宰府跡、多賀城跡、草戸千軒遺跡、一乗谷朝倉氏遺跡、吉野ケ里遺跡など大規模遺跡の調査や保存整備に携わった奈文研OBを中心に結成されたグループで、年1回全国各地の遺跡の調査や保存整備状況の見学を続けている。私は2004年の岡山県鬼ノ城遺跡の見学会から参加している。

注2『先祖附 南東二四』は森本家第七代の森本儀十郎が藩に届け出たもので、森本家先祖の森本儀太夫一久以来の系譜・功績が詳しく記録されており、藩の公式記録として信用度の高いものである。初代が「曾祖父」、二代目が「祖父」、三代目が「父」、四代目が「私義」と冠せられていることから分かる様に、四代目までの家譜は享保12(1727)年5月に家督を継いだ4代目森本儀太夫一瑞が藩に届け出た家譜をそのまま利用して書き継がれたものである。論考(2)に現物と積文を掲載しているので参照されたい。

- 注3 石澤良昭2004「1632年にアンコール・ワットを訪れた森本右近太夫一房の消息」『三笠宮殿下米寿記念論集』三笠宮殿下米寿記念論集刊行会編
第1図の「森本家系図」では森本儀太夫(一友)の弟として右近太夫(一房)の名があるが、『森本系譜』にある一友の弟一純が右近太夫一房であるかどうかは不明である。
- 注4 大山崎町歴史資料館福島克彦館長の教示によれば、『大日本古文書 石清水文書之三』「八幡社領改帳」に「六位安居本頭神人の森本数馬・森本将監・森本武兵衛」の名があり、石清水八幡宮と山崎との関係の深さからみて、山崎の地に森本姓の人の居住が考えられるとのことである。
- 注5 上妻博之1988『新訂肥後文献改題 附索引』舒文堂河島書店の「史之部史伝」の『加藤家傳』の解説に「本書は(寛永8年秋8月24日に)加藤清正公家臣中の三傑の一人森本儀太夫一友が筆記して、その子森本齋喜に与えたものを、元文元年(1736)森本儀太夫一瑞が浄書して本妙寺に寄進した稿本を明治13年森本義治が出版したものである。奇正両巻からなり、奇の巻には清正公の生立から一生中の事蹟を記し、ことに朝鮮征伐の記事を詳細に書いてある。正の巻には加藤公の備立、肥後留守居在番名付、清正公武具図および加藤家軍詞等を収録してある」とある。『加藤家傳』は『続群書類従第23輯』に収録されている。
- 注6 蒲生真紗雄1993「加藤清正家臣団事典」安藤英男編『加藤清正のすべて』新人物往来社
- 注7 安藤英男1993「加藤清正・その生涯と人物」安藤英男編『加藤清正のすべて』新人物往来社、
- 注8 森山恒雄1994「肥後加藤政権と重臣飯田角兵衛(一)」『市史研究 くまもと』第5号
- 注9 石田善人1978「第1節 両細川の対立、第2節 国衆の強盛」『兵庫県史』第3巻「第7章 戦国争乱の世」
福島克彦2009『畿内・近国の戦国合戦』(戦争の日本史11)吉川弘文館
天野忠幸2020『室町幕府分裂と畿内近国の胎動』(列島の戦国史4)吉川弘文館
- 注10 『伊丹市史』第1巻「第3節 戦国時代の伊丹地方 1971
『兵庫県地名大辞典』森本<伊丹市>の項 角川書店 1991
『兵庫県史』史料編「北河原氏家蔵文書」1997
- 注11 私は2020年10月25日に開催された「乙訓文化遺産を守る会」総会で、野田泰三氏(京都橘大学)の講演「西岡土豪の16世紀」を拝聴した。その時野田氏から「森本氏の出自は摂津にあるのではないか」との教示を受けた。